ニーオチ
「それは僕たちの結末についてだった」
二人が五日で一万字を書き下ろした衝撃の短編集が遂に登場

P02　一話
「焦げたトーストは、苦いのにやたら美味しかった」
P05　二話
「鯨が爆発する映像」
P07　三話
「七パーセントの恋」
P10　四話
「そいつは気だるげに私を見返した」
P13　五話
「ドブをまんべんなく染み込ませた機械戦争」
P17　六話
「僕は僕だけの秘密を持っていて」
P20　七話
「ぷかぷかと浮かんでしまった言語情報」
P24　八話
「企画倒れとは言わせない」
P27　九話
「あなたがいるんだよね」
P32　十話
「君は何を得た？」
P35　special episode
音無さんはおとなしい edit by OMC

一話

拝啓、愛しい人。どうしていますか。
いえどうか、分かり切ったことでしょうと笑わないでください。
私はといいますと、あなた宛ての郵便を受け取ったところです。

以前のあなたなら、このように髭も剃らないみすぼらしい私の頬を、かわいいと見つめてくれたでしょうか。
私はもっと、あなたのことを知りたかった。その笑顔も、怒った顔も、なんでも知っているのに、ただ一つ、今もまだわからないのです。どうしてあの雨の日、ざあざあと降っていたあの日、あなたが悲しい顔をしていたのか。
水が跳ねて、傘も放り出して、お気に入りの服さえびちゃびちゃにして、どうして私に、寂しそうな背中を見せたのか。

あなたの部屋は、そのままにしてあります。海に行った時の写真、これはあなたしか写ってないけれど、いつも私の胸の中、その頃の出逢いを、繰り返している見せて

くれているようです。
その無邪気な笑顔も、ウインクが得意な瞳も、ほんの少しだけ染められた髪も、もう写真の中に固定されて、果てしない人生の中、それ以外はたった一度も、向けてくれる日は来ない。
だから私はもう何かもわからないのです。

あなたの頬はもう、えくぼをつくることなく、あなたの瞳はもう、私と見つめ合わせることなく、あなたの髪はもう、これ以上伸びることなく、そしてあなたの心はもう、私と通うことはない。
ああ、そこに横たわる愛しい人よ。まるでお酒にでも酔わされたように床でねむりこける愛しき女性よ、確かに私はあなたを愛している。そしてあなたは、愛してくれていた。そうであって、それ以外ではないのに、神さえ侵すことのできない私たちの愛をどうして歪ませることができるのか。

あの苦しそうな顔を見るくらいならば、私は何もしない方が良かったのかもしれない。でも確かに私が手をかけたとき、あなたは笑っていた。それが何よりも悲しかっ

た。

そう、私はあなたを、あなたの人生、命を、奪ってしまった。こうする他に、何も無かった。たったの一つも、あなたを治す方法が見つからなかった。笑顔の裏、心の底で苦しむあなたを、楽にしてあげたかった。そして、あなたが望んだ最後の景色が、うす暗い病院でも、家族に囲まれた穏やかな日差しの中でもなく、私の笑顔の前だった。

だから、私は……。

私ももうそちらに向かいます。約束ですから。

では、また会いましょう。

今、あなたが私に初めて作ってくれた、焦げたトーストは、苦いのにやたら美味しかった。

二話

聞き覚えのある声が聞こえた気がした。だが、死体からガスが出るという話――と、いつか見た鯨が爆発する映像――を思い出して、気にするのはやめようと思った。死人に口なしという言葉も思い出したが、これは誤用らしい。そういえば、水死体をどざえもんと呼ぶのも、ガスで膨らんだ姿が同名の力士に見えるかららしい。しかし、その姿は当然ながらガスで膨らんだ死体に例えるには似つかわしくない。

もともと無口だったが、こうして何も喋らなくなると本当に死んだと自覚する。死体を前にした気持ちは感慨と理性に後始末を急かされるような憔悴感だった。鼓動がうるさく聴こえて、血管を通じて全身に振動が伝わるような感覚――死体を前にして鼓動を感じるなんてとんだ皮肉だと、妙なほど冷静に客観視した――だ。これが嫌で目の前の死体から目を背けて、ガスがどうこうと現実逃避をしていたのに、気がつけばそれを思い出していた。耳が澄んで鼓動に負けないくらい周囲の音が気になっていた。深呼吸するが、息が詰まるだけだった。今だけは何もかもを投げ出したかった。窓を開けて外の空気を吸おうと思ったが、誰かに見られるのは嫌だった。そして、ここが窓も開いていない密室であることを思い出して余計に気分が悪くなった。

とにかく気分を変えられるなら何でもよかった。どことも知れない場所――そこがどこであれ、ここの閉鎖感を思い出した――で誰とも知れない人物と過ごしている光景を思い浮かべた。自分たちの言動は支離滅裂だ。そして、その人物は日常のなかで唐突に倒れ、そのまま死んでしまう。心像で繰り返される光景は考え直そうとするたびにのらりくらりと異なる状況を映し、自分の意思で制御できない。だが、それを自覚した時点で意識を取り戻していた。

そこには死体があった。それは目を向けようと背けようとそこにあり続けた。今はできるだけ考えたくなかったが、意識せずにはいられない。それをないものとして扱って過ごすにはここはあまりにも狭く感じた。そこで好奇心と呼ぶには不謹慎な興味が芽生えた。死体の顔を改めて見たが、死に顔としては安らかな部類だと思った。何を思いながら死んでいったのだろう？　いつか死ぬならこれほど安らかに死にたいとも思ったが、冷静になって思い直すと今は別に死にたくないことに気づく。感想としては生気がないというのが妥当だろうが、意識しなければ死体だとは気づかなかった。その瞳はいまだにうつろな光をたたえており、濡れた睫毛がゆっくりと下を向いた。

三話

耳触りのいいその声が、好きだと思った。聞くところによると、聴覚という脳を挟んだ両側面に備え付けられた音波受容体は、人間個体の状況判断にわずか七％程度しか役に立たないというのが通説だ。

それでいて君の発話に耳を傾けをそれをつまるところ好きになったという状況は、九割以上の可能性で勘違いということになる。

対照的に九割近くもの判断材料に採用された視覚システムは、あいにく僕に恩恵をもたらすことがなかった。僕の世界は暗黒で百パーセント、ヒトの認識可能な百万色の景色に真っ黒（とよばれる）の油性マジックで塗り潰した『光景』が限りなく続いている。

だからこそ、君という「視える」存在は、愛するに値する。

君は不思議だ。僕は君を視ることができる。初めは僕も、君が何であるのか、分か

らなかった。今でもまだ、完全にはどのような光の吸収と反射によって（いわゆるところの）発色をさせているのか想像することができない。

だけれども、君は僕が存在してる限り、いつでも傍にいてくれる。そしてそれは物理法則と僕の『視覚情報』によって、強固に保証されているのだ。

今、君はこちらに手を伸ばしてきただろう。僕にはそれがわかる。僕も手を伸ばしている。これらから数秒後予想されることは手と手の触れ合いだ。握ることは僕にとって難を要するが、指先同士の邂逅は君と僕とがこの世で認識を確かめ合う唯一の『手』段だ。

君は、僕のことを『貴方』と呼ぶのだろう。僕にとって愛すべき隣人としての呼称としては、多少他人行儀であるような気がするものであるかもしれない。だがしかし、他人であると意識することこそが、君が存在できる一つの方法なのだ。

あまり君と僕とが精神的に接近してしまうことは、将来的に僕たちの関係の融解へと路線を敷いてしまうことになる。だから僕たちは互いに他人と定義しあうことで、互いの空間での色素をその『眼』に捉えていくべきなんだ。

僕はまた君のことを感じて微笑むが、きっと君も僕と同じようにささやかで柔和な笑みを寄せてくれているだろう。私が君に語りかけると、君も語りかけてくれる。たとえ七パーセントの恋であっても、僕にとっては全てだ。

ほら、やっぱり笑っている。僕はそれを感じられる。それが全てであり、それが僕で君で貴方で僕だ。

どうしてその笑みを僕に見せてくれるのか、見えないけれど、鏡に映った僕である君は言う。貴方があんまり楽しそうに笑うからついつられてしまった。

四話

こんなところで、どうしたの」

「見れば分かるでしょ」

「じゃあどうしてそんなところで寝ているの」

「さあ」

私に見下ろされながら、ひょうひょうとした態度で進路を防ぐように横たわっているこいつはこういうやつだった。避けようにも避けられないので、仕方なく跨いだ。もし視線を下げていたら、きっと不服そうな顔をしていただろうが、どう考えてもこんなところで寝ているほうが悪い。

戻ってきてもそいつはまだそこにいた。だが、その姿が妙に寂しく思え、隣に座ってやることにした。こいつのことは嫌いになれなかった。多少は高低差が縮んだが、

まだ頭が低い。そいつは横目で私を見上げていた。

「ずっとここにいるの？」

「ずっとっていうわけじゃないよ」

「じゃあいつまで？」

「そのときになってみないと分からないね」

その通りだ。こいつはその気になればいつまでも、悪びれもせずここに居座るが、目を離した隙にいなくなっているかもしれないやつだった。その口ぶりはのんきだが、先の印象から、陰があるような気がした。それとも本当に何も気にしていないのだろうか？　その表情からは感情を窺い知れなかった。

隣にいて思ったが、こいつとはいつまでこうして一緒に居られるのだろうか？　こいつは自由気ままで、時間の流れなんてまるで気にせず、きっと自分でも気づかない

うちに生涯を終えるだろう。考えていて思ったが、それは自分たちも同じじゃないのだろうか？　はたして、どれだけ自分の人生を意識して生きられるのだろうか？　不安になって思わずそいつの顔を見た。

「どこを見ていたのさ」

そいつはけだるげに私を見返した。なぜか自分を見てほしかったような口ぶりに思えた。こいつを前にすると今まで考えていたことが馬鹿らしく思えてくる。私は気恥ずかしくなって顔を背け、そのまま立ち上がったが、この場を立ち去る前にこいつを文字通り足蹴にすることにした。腹が立ったから、脇腹をつついてやった。

五話

背中についた爪の痕が、痛いのか熱いのかわからない。そうか、死ぬってこういうことんだ。みんな逃げてくれ、俺を置いて逃げてくれ。俺たち人間は弱すぎるんだ。

――ドブをまんべんなく染み込ませた機械戦争と言う名の体液が、俺たちの腐りきった生活さえ踏み散らかす日が来てしまった。優秀な精度とコンピューターを積んだクソみたいな殺戮兵器が、人間のどす黒く変色した血液さえもシャワーのように浴びまくっている。

俺の町にまで地獄の配達とはどうにも律儀が過ぎる。相手がバカな国なのか間抜けた機械の暴走かなんて、誰の関心ごとでもなかった。何者かが狂人だろうと、冷徹な悪魔だろうと、こっちが死んじまえば何の関係もねぇ。そんなこと勝てる算段がついてる奴が頭回してくれればいい。

様子を見てくると言った親父は、朝飯を口に入れたまま腹を裂かれて死んだ！　フアック！

続いてレンガ造りに似せたコンクリートの家が、太陽光発電ごとローン未完済のまま一瞬で崩れ去った！　ファック！

斬り裂け落下した天井に押しつぶされた母さんを見て、俺は大嫌いだったのに泣いた！　ファック！

産まれ生きた家から逃げ出せたのは俺と兄だけだった。だが十数分後、走っていた俺の横で突然蜂の巣になった！　なぜ俺じゃなく優しくも意地悪な兄だったんだ？　ファック！

そして俺は、間一髪で臓器を避けることのできた痩せた背中から血を、毎秒毎拍どくどくと溢れさせていた。ファックだクソッタレ！！

周りを見れば、文明の構造を嘆くような人間が次々と見事な殺陣を狂演していた。

んでもって、骨ををグリっと踏み潰し肉をブチュっと引き伸ばし、また採りたての鮮血の上をバシャバシャとダメ押す訳分かんねぇファッキンマシーン！！

こんなろくでもない最ッ悪の皆殺しは、到底人間ができた芸当じゃあない。お前たちが人間様と違うのは二つ、それは最低な知能がない最高の殺人鬼なこと、そしてもう一つは、ファックするケツの穴が無いことだ！

最期に一発、かまして、んで、後はひき肉にでも蜂の巣にでも好きにしろ！

その時、俺の目の前でけぇ面した鉄屑が銃器似たでけぇガラクタを向けた。

もうこれといって思い残すこともない。ダチに金返してもらってないくらいだ。だが走馬灯とやらは俺の元には来てくれないのか？　死ぬときゃ涙の一つ流しながらゆっくりと看取ってもらいたかった。願いが今叶うなら、こういう時来てくれるやつってのは……。

「なにしてるの？行きましょ！」

はっと気づく。そいつは俺の目の前で手を差し伸べていた。

いた。近づけた手を、けれど俺はひっこめた。

「なんで、お前」

片思いの女によく似て

そう言いかけて、

「ああ」

私と哀れな男が繋いだ手は今度こそ振り払われずに、きゅっと握り返された。

六話

「ねえ、秘密の話なんだけど」

友達の輪から抜けて、噂好きの同級生が僕に話しかけてきた。こいつはいつも身内でつるんでいて、話が盛り上がればこうして席の近い僕にまで話しかけてくる。仲の良し悪しというよりも、お互いにほとんど面識がなく、こいつが自分の顔を覚えていなさそうなところを鑑みると、この関係を意識しているのは僕くらいに思えた。

こいつは誰かと話すよりも、自分が話すことを目的にしているようで、それなら自分の扱いにも納得できた。返答を求めないという意味では、こいつの言葉は究極的には独り言なのかもしれないが、さすがに話し慣れているようで聞き心地がいい。黙って話を聞いている自分の姿を客観視すれば、僕たちは話し上手と聞き上手だ。

それにその独り言は普通の会話と何が違うのだろう。返答を曖昧な相槌で済ませる会話もあるのだから、会話の条件とは話題の共有なのではないだろうか？　こいつの話題といえば身内から芸能人にまで渡る根も葉もない噂話や内輪話の隠し事くらいで、特に興味を誘うわけでもないが、たとえ公然の秘密であっても自分たちで話題を共有

するのは心地良かった。僕はこいつの話を聞いていて、恥ずかしげもなく笑ってしまったことがある。

それでもこいつがなにかを僕にだけ話してくれたことはなかった。僕はいつも周囲のついででしかない。僕は噂好きのこいつから自分たちだけの秘密を共有したかった。同じ店に入って、お互いの好き嫌いを知って、それを誰にも話さないで思い出を胸の奥にしまいたかった。誰かに見られていてもいいから、こいつの話すような噂話の主人公になりたかった。ただし口の軽いこいつのことだから、その話の出所はこいつ自身かもしれないと余計なことまで考えた。

だが、僕たちがそんな関係になれるとは思えなかった。僕がこいつの話を聞いていても、こいつは僕の返答をきっと聞いていなかった。話題の共有していても、こいつから一方的に押し付けられるばかりで僕が意見を出したことはなかった。それでもそれは普通の会話と何が違うのだろうか？　コミュニケーションにおいては、肯定や否定だけではなくときに沈黙や無視が手段として用いられる。僕が無理にでもこいつに話しかけてもコミュニケーションだが、そうしないのも一つのコミュニケーションの形なのだ。

僕は僕だけの秘密を持っていて、それは誰にも語らずにいる。これからもこいつとの関係が続くかどうかは分からない。こいつもわざわざ僕のことを考えているわけではない。僕にはただ、また会えますようにと願うほかないのだ。

七話

「ねえ、秘密の話なんだけど」

そこで僕は遮った。

「いーや、秘密なんて知らなくていいよ」

抗議するように口を『ム』にして頬をぷっくら膨らませるこいつは、僕の脳内会話帳に唯一名前を連ねたクラスメートだった。また聞きらしき秘密をいつも拡散させようとしては、僕が断って不機嫌な顔を披露してくる。

噂の回覧板は珍しいものではなかったが、僕はどうにも好みじゃない。わざわざ誰かの秘密を知っても、こちらに何の徳も得られやしないからだ。それに、内緒ごとを広められたくない人がいるはずだろう？

ただ、自分でも聞き上手じゃないってことくらい分かってる。僕は確かに否定とい

うコミュニケーションを起こしているけれど、目の前の話し手にとっては、用意しておいたたくさんの言葉は伝達されることもなく、ただ空気中に投射させるしかないからだ。ぷかぷかと浮かんでしまった言語情報は誰にも拾われることなくて、相手は僕と話しながら、独り言を発散していることになる。

だけどどうしようもない僕は、そんな関係が気に入っていた。独りよがりのエゴだけれど、性懲りもなく秘密を打ち明けようとする時の輝いた瞳や、断られた時のふくれ面に、どうも中毒にされていた。

きっと秘密を聞いたら、もっと会話が弾んで、二人だけの内緒話だってできるかもしれない。でも耳を傾けてしまったら、もう二度とあのどこか笑顔交じりのある不服顔が見られなくなってしまうのだろうか。

だからずっと、悩みながらも断り続けていたんだ。

段々、自分にバカなんじゃないかと問いかけるようになった。いつも秘密を遮ってくる奴なんかと、突然関係を深められるはずがないだろうと。

そう、僕はいつのまにかもっとあの子のことが知りたくなっていた。そして僕のこ

とも知って欲しくなっていた。だけど、この関係を崩してしまったらもう戻れない。
そんなちっぽけなことが気にかかってしまうことが、僕の臆病だった。

「あのさ」

もうクラスメートを続けられる日もあと少しまで近づいてきた頃、僕はとうとう、この小さな幸せを鳥かごから解き放つことにした。

「なになに？」

ちょっと恥ずかしくて胸がくすぐったかった。目の前で君は、無邪気そうな微笑みをかけてくれている。それは珍しく僕から話しかけたからだろうか。
だけどが、その優しさには甘んじず言葉を繋がないといけない。なのに、この時でさえ本当にこれでいいのか分からなかった。

だから、だと思う。そんな言葉が出たのは。

「僕の秘密、聞いてくれる？」

そう口にしたのは、それが僕たちの会話が始まる合言葉のようなものになっていたからかもしれない。

そして君は返す。

「秘密なんてしーらない」

その言葉はまた、いつもの僕をまねていた。優しげの中どこか恥ずかしそうな君に、思わず笑っちゃいそうだった。

ようやく君の秘密が分かった。

だからこそ僕は君と同じように、腹が立ったから、脇腹をつついてやった。

八話

きっと仕方の無いことなのだとそいつは語った。原因はいろいろ思いついたが、過ぎたことを悔やむのもまた仕方の無いことだった。僕たちの努力は失敗によって一区切りを迎えたが、それは必ずしも徒労を意味しているわけではないと思いたかった。

その道中では意識しなかったが、僕たちは過程か結果のどちらかを共有し、それに勤めていた。そうしたすれ違いが繰り返されて今回のようになったのだろう。ただ僕たちがその間だけでも一丸となっていたのは変わらない。

次を思わずにはいられないが、そうして先のことまで考えていたから目の前にまで目を向けられなかったと思った。だが、どうやって先を見据えないで今のことを考えられるのかと自分に釈明したくなった。

僕たちが組めば無敵だと思っていた。それがなぜ叶わなかったのかはこれから考えることにする。

僕が諦めていないのだからそいつにも諦めないでほしい。それは応援というよりも義務感か使命感か、最も直接的な言葉で表すなら連帯責任といった具合だった。そう

だ。僕と関わったなら最後まで付き合ってもらう。どこかで無駄遣いするくらいならその才能を僕に置いていってほしい。

僕たちは結果ではなく共に過ごす過程を求めていたのだろうか？　それが真実なら僕たちの語った夢はとんだお笑いだが、それとも夢を目指していたからこそ自分たちの居場所があると信じたかったのか、それもこれから確かめよう。

考えるほど先見の明があると思える企画が浮かんでくる。企画倒れとは言わせない。僕たちの関係は旅は道連れかつ死なば諸共であり、僕は成功するまでやれば失敗じゃないと思っている。今やらずに誰ができる？　僕たちがかつて大きな一歩を踏み出そうとしたのを忘れたのか？　だが、大きな歩幅で歩こうとしてすぐにこけたことは忘れるべきだ。

そいつは僕の話を聞いて頑張ってみせた。そいつのそんな姿に夢見てしまったのは僕にとってきっと仕方の無いことだ。ここまで話が進んだのはそいつにも責任がある。

そいつがどこに行こうと、僕がそいつから離れられないように、そいつも僕と同じ場所に集まってくる。だからこそ僕たちはまた挑戦できると分かっている。また必ず会えると知っているから。

九話

「ずっと貴方を探していました！」

それは私が半年待ち続けたたった一つのコトバ。

「ありがとうございますっ！」

だがその返答をしたのは私じゃなくて、私のブース前にたむろしてる可愛げなカッコの女子でしたとさ。

こっちはというと、開けかけた口をあくびに見せかけて、自意識カジョー系女子予備軍の回避に精一杯。

シャッター音を耳に強要されている前の私は、なんだかとってもみじめな路傍の石だった。

コミックパーリィーなんていう、個人の作家が集まる年二回の大会に参加してはや

一年。夏パーリィーは暑かったけど、冬パリは寒い。暖房とかないのかなぁ。ぐるぐるに巻いたマフラーを、鼻まで覆い隠した。

じっと目の前を見つめる。印刷された数百部がバラーっと意味もなく積み上げられてる。そのくせお客さんが来ないってことはつまりそういうこと。

……経験や人望がないなんて、わざわざ言われなくったって。

そもそもこんなのに参加しているみんなは、忙しくて、でもやりたいことがあって、夢と熱意と一生懸命に溢れてるんだ。

私はっていうと、その中一つも持ち合わせてない。することがなくって、でもそれじゃあ私の意味ってなんなのかわかんなくなっちゃいそうだった。

だから暇な時間をつまみ食いして、ちまちまと続けてた。一応、趣味って言えるくらいにはなってきたつもりだよ。

でも出来映えはっていうと、正直お客さんに魔法をかけても買ってもらえそうにないくらい。夏パリは初参加者への興味本位なのか呪いの儀式にでも使うのか、数部は

買ってくれいてた。
だけど今日まだノーリアクション！？　なんでかなぁ？これが地球温暖化の影響なの？昨日のニュースでも氷が小さいって言ってたからきっとそれだよね。違うか。違うよね。

もうこうなったらやけくそってやつ。おやすみして今日一日ぐっすりな迷惑系になってもいいんだからね。隣に用意された空席パイプ椅子を並べて枕代わりに……。

「ちょっと」

仰天飛び起きた。だ、誰！？

「何ヒトの席で寝ようとしてるのよ」

絶妙なタイミングで戻ってきたのは、夏パリの後知り合った女の子。私とそっくりな境遇で意気投合して、なんと今回は合同で参加したのだ。

「あのねぇー、売り子行ってくるって言ったよね？そのくせにあんたってのは……」

「ご……ごめんだよぉ」

「とは言っても、こっちも全然ダメ。一つも売れなかったわ……」

ということは誰も、私たちの希望ある合同企画なんて求めてくれなかったんだ。なんだろ、なんだかなんだか悲しいや。

「それに実は……広すぎて迷ってたんだけどね。半分は帰ろうと思って、ずっと貴方を探していただけよ」

「あーっ！！」

「な、何よ」

それは私が半年待ち続けた、たった一つのコトバ。
そうだ、売れなくたって、愚痴をいう相手が目の前にいる。私たちたくさん言い争ってケンカしたけど、半年前までとは違う。あなたがいるんだよね。
私たちきっと、誰にも求められない最悪のコンビ。だけどきっと、私たち最大のコンビ。

ありがとうなんて言いたかったけど、本当に嬉しいとき、言葉よりも涙が出るのだと知った。

十話

きっと仕方の無いことなのだとは誰にも絶対に言わせない。それは僕たちの結末についてだった。

僕は世界を売った男だ。そして階段で話しかけてきた男の語ったもう一人の僕こそが君だ。君はずっと昔に一人で死んだんだ。ひどい死に様だが自業自得だ。ざまあみろ。

君はきっとその程度の存在で、君に期待した僕は馬鹿だった。そしてだからこそ僕は生き残ったんだ。ラストマン・スタンディングに則るなら僕たちはそれぞれの勝敗を得た。

あれから僕は慎ましく生活しながらそれに満足しているけれど、君は何を得た？何もかもを投げ打った君はきっと皆から忘れられるし、僕は君のしてきたことを忘れない。たまにでも僕のことを思い出してくれるかい？　それを後悔するくらいなら最

初からやらなければよかったんだ。

世の中には持たざる者や得らざる者がいるけれど、君は彼らの代わりに義務を全うしようとせずに逃げ出したんだ。そうするくらいなら初めから全て僕に渡して、そのままどこかに消えてくれればよかったんだ。

僕たちは友達だったんじゃないのか？　挨拶もないなんて水臭いじゃないか。それとも君は僕を騙したのか？　何のために？　一緒に夢を見てどんな対価を騙し取ったんだ？

君はあのことなんてなかったように今でも幸せそうに暮らしている。でもそれは完全犯罪を行った殺人犯がのうのうと生きているようなものだ。そして殺されたのは僕ではなく君自身の可能性で、僕はかつて君が目指した君自身の代理人だ。

君の目指した目標がそこなら、僕は君の足跡をたどってみて、途中で横道にそれて、ずっと先にまで行ってやる。いまさら後悔しても遅いんだ。君の目標もすぐに僕が叶

えてやる。君がどこまで先を見据えていたか、そして道を誤ったことを世界に知らしめてやる。

そろそろ言うこともなくなってきたけど、今までずっと思っていたことを吐き出せてすっきりした。でも僕の感情はこんなものじゃないぞ。

君にはいろいろなことを言ったが、今でも君のことは好きだ。僕とは違う道を辿ったが幸せでいてほしいとずっと思っている。でも、だからこそ、そんな君が僕と同じ道を諦めたことが悔しくて、こうして八つ当たりみたいに今でも逆恨みしているのも本心だ。

今でも君が戻ってきてくれたらだとか、僕が君の元へ向かえればと思わない日はないが、僕たちはもうやり直せない。僕たちは出会ったのが悪かった。今はもうお互いの生き方で幸せになるしかない。

あの頃の僕たちが見ていた光景を思い浮かべたら、あんまり綺麗で、目頭が熱くなった。

音無さんはおとなしい

同じ高校に通っている音無さんについて知っていることは少ない。

珍しいと思った名前を普段から物静かだった彼女と関連づけて覚えていたくらいで、その存在は今まで意識してこなかった。

その日の音無さんとは校舎裏で会った。そこは校内の喧騒から逃れるためによく行く場所で、人は滅多に来ないはずだった。だが、そこで時間を潰していると、ふと彼女の姿を目にした。実際に姿を目にするまで気配に気づかなかった。それどころか、驚いて情けない声を上げそうになった。

音無さんがここに来た理由は僕と同じだとして、彼女はいつからそこにいたのだろうか？　初めからいたのなら、僕は途中からやってきた邪魔者だ。あるいは、彼女が途中から現れたのかもしれないし、その気配のなさから、ありえないことだと思いつつも、僕が最初にここを見つけたときから一緒にいたような気さえしてくる。

どちらにせよ、お互いにとってわざわざ喧騒を避けるために訪れるような場所で、

誰かと会ってしまったことになる。周囲の静寂も相まって、二人きりでいるのは気まずい。だが、この状況では話しかけるのもためらわれた。そのまま立ち去るのも不自然のように思える。

ところが、音無さんは、そのままその場に佇んでいた。壁に寄りかかって明後日の方向を向いているのは、僕への無関心の表れか、周囲の物音に耳を澄ましているようにも見える。

来たときの目的を忘れないように、彼女を意識しないためにも、僕は彼女に倣って明後日の方向を向いた。

ただの、校舎裏の光景が広がっていた。耳を澄ませてみると、本当にいろいろな音が聞こえてくる。校舎のそばの道路からは車の音や足音が、周囲では鳥の鳴き声や木々のざめきが、校舎からは生徒の喧騒が聞こえていた。

音無さんとは別々の方を向いていることを意識して、試したくなったことがあった。僕は思い切って目を瞑る。光が瞼を通して伝わってくるが、光景を捉えることはできない。いきなり目を瞑った僕の姿を、彼女は変な目で見ていないだろうか？　不安をよそに、考えていたことを思い出す。

音無さんのいる方からは気配が全くしない。見えなくなった彼女が本当にそこにいるのか、不思議な感じがする。

寝付けない夜に、目を瞑りながらよく考えることがある。僕たちは見ることで世界を確かめている。それが見えないときに、世界は本当にそこにあるのだろうか？　世界が見えなくなっても、音は聞こえている。見て確かめていたものが見えなくなっても、聞くことで確かめられると僕は思っている。

それじゃあ、音無さんは？　彼女の方からは何も聞こえない。もしかしたら、本当にいなくなっているのかもしれない。彼女は僕の様子を気味悪がって立ち去って、僕は一人で目を瞑りながら佇んでいるといった光景を想像して、悪寒が走る。

それでも、音無さんにはなんとなくそこにいてほしい。僕のことなど気にせずに、ただその場の静寂を共有していてほしい。そういう人が一人くらいいてもいいんじゃないかと思う。

スタッフ

表紙イラスト
by くりえーとコヒコヒ

本編
OMC＆くりえーとコヒコヒ

表紙ロゴ・帯デザイン
ふしあな

スペシャルサンクス

マキナス４シリーズ（帯フォント）

こんなお話いかかですか（本編お題）